

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月13日現在

機関番号：32629

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2011

課題番号：22700630

研究課題名（和文） わが国の体育における女性研究者のアイデンティティ構築とキャリア形成に関する研究

研究課題名（英文） Investigation of construction of identity and career development of female researchers and teachers in the field of sport and physical education

研究代表者

稲葉 佳奈子（INABA KANAKO）

成蹊大学・文学部現代社会学科・専任講師

研究者番号：70431666

研究成果の概要（和文）：明治期より女性体育教師像は多様な要因から複合的に形成され、その表象は文脈に左右され、社会的な評価も変化した。また、女子体育と婦人問題という問題領域は大正期においてすでに乖離していた。そして戦後、社会的には女性運動の興起がみられた一方で、体育領域における女性たちはキャリア形成という課題に直面しつつも、問題の直接的な改善よりむしろ「体育人」としての実践を追究し続けた。つまりこの時期、体育領域における女性のあり方を問う姿勢と、女性の社会的位置づけをめぐるフェミニズムの問題認識とは視角が共有されることはなかったのだといえる。

研究成果の概要（英文）： Representation of female teachers of physical education has been dependent on context, and they are not always socially depreciated. And there was disconnect between women's movements and promoting physical education and sport for girls since the Taisho era.

In the postwar period, despite rise of feminism, female researchers and teachers in the field of sport and physical education didn't so much addressed feminist issues including career development of themselves but investigated how to make a contribution to the field of sport and physical education as "taiiku-jin".

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・スポーツ科学

キーワード：ジェンダー、承認と再配分、ダンス

1. 研究開始当初の背景

ジェンダー視点からの体育・スポーツ研究によって、おもに次の二点が構造的な問題として指摘されてきた。まず、体育・スポーツ

文化は男性を中心に制度化および組織化され、「男性性」を重視する価値基準にもとづいて構成された男性中心主義文化であるということ、もう一つは、スポーツの実践やス

スポーツ・メディアを通じて、個人的な認識および社会構造としてのジェンダーが強化・再生産されるということである。そうした成果をふまえて、わが国におけるスポーツ・ジェンダー学は、既存のジェンダーの強化に荷担しない体育教育やスポーツのあり方、メディア・リテラシーなどをめぐる、より具体的な方策の追求へと向かいつつある。しかし、近代スポーツの成立から現代への発展過程における「男性性」の称揚およびその基盤としての二項対立的な性認識については、それらが体育・スポーツにおける女性を周縁化あるいは抑圧したという点が自明の前提とされるのみであり、「男性性」の称揚や二項対立的な性認識がどのように女性のふるまいや集団的アイデンティティに影響をおよぼすのかという観点からの考察の深化はみられない。

一方、認識論的基盤としてのフェミニズム理論の動向に目を向けると、ポスト構造主義の影響のもと、二項対立的な性それ自体の自明性を疑う立場がみられる。性の構築性を前提とし、いかに性に関する認識や集団的アイデンティティが構築され、構築された性がいかに規範からずれていくかを問う議論は、性にかかわるアイデンティティや身体認識を脱構築する文脈において、身体を基盤とする文化としての体育・スポーツ論との親和性が高いと考えられる。

2. 研究の目的

本研究は次の二点を明らかにすることを目的とした。

(1) 戦後学制改革以降の体育領域における女性研究者が、拠って立つ社会的文化的カテゴリーの境界をどこにおき、カテゴリー内部のみずからのあり方をどのように認識したのか

(2) 女性研究者による文化的承認のポリティクスが、体育における経済的配分のポリティクス、すなわち体育における女性のキャリア形成にどのような形で影響したのか

3. 研究の方法

(1) 予備的調査および分析
女性のキャリア形成に関する研究は、対象となる時代や出身校、地域、職業、「理系/文系」の別におよぶまで視点が多岐にわたっており、研究の蓄積が豊富である。それら先行研究の検討から、本研究におけるキャリア研究分析のための方法論を示す。ただし、本研究の位置づけは量的研究ではなく、数量データに他の要素を関連させた考察をおこなう。

(2) 女性研究者のキャリア形成の把握
女性体育研究者のキャリア形成について、出

身校、取得免許、専門競技種目、キャリア形成の過程といった観点からのデータを収集する。

(3) 次の三つの問いにそくして、文献調査およびインタビュー調査をおこない、その結果に見いだせる言説についての分析をおこなう。

4. 研究成果

(1) 本研究の目的のひとつである「戦後学制改革期以降の体育における女性研究者」のキャリア形成分析にあたり、その予備的調査・検討として、研究対象をめぐる歴史的文脈を明らかにした。まず、明治期の中等教育において女性体操教師がどのような位置づけにあったのかという点について、制度的側面、言説の側面、女子体育をめぐる学問的背景という側面から分析をおこなった。その結果、さまざまな要因から複合的に形成されたがゆえに文脈ごとに多様な位置づけをもつ女子体操教師像が明らかになった。それは、従来の「女子体操教員＝社会的評価が低い」とは異なる新たな見解であり、したがって上記の研究は、戦後の女性体育研究者のポリティクスを分析する際に有効な視点をもたらすものである。

(2) つぎに、女性体操教師の位置づけおよびポリティクスと社会背景との関連を把握するため、大正期の婦人問題をめぐる論争や運動の文脈における女子体育の位置づけに着目し、文献資料をもとに分析をおこなった。その結果、婦人運動の一環としての講演会に女性体育家が登場するなど、一時期は交差したかに見える女子体育と婦人問題が関係を継続し得なかったことが明らかになった。このことは、女子体育と婦人問題という問題領域の乖離は、戦後の国内におけるフェミニズム運動と女性体育研究者のポリティクスとの距離にも影響をおよぼしている可能性を示唆するものであり、体育界における女性のキャリア形成とアイデンティティの問題を考える際に重視すべき前提となる。

(3) 本研究は、戦後学制改革以降の体育領域における女性研究者が、よって立つ社会的カテゴリーの境界をどこにおき、カテゴリー内部のみずからのあり方をどのように認識したのかという点を明らかにしようとしている。そこで前年度の研究成果をふまえ、戦後の女性体育研究者による言説を分析すべく文献調査をおこなった。

1969年の第6回国際女子体育会議では、女性の「職業人としてのめざましい社会的進出」をふまえた「女子と子どもの教育」と「体育・スポーツの占める位置」の重要性への認

識がしめされ、女性研究者における体育学的識見の深化がうたわれた。一方、社会的には高度経済成長期を経た日本において「ウーマン・リブ」といわれる女性運動の興起がみられ、より一般的に、女性のライフコースと性役割をめぐる問題や葛藤が認識されるようになった時期でもある。そうした社会状況を背景としながら体育領域における女性たちが「集団的に」一貫して問いつづけたのは、みずからが置かれている立場や役割それ自体ではなく、現状の立場からいかなる「体育人」としての実践を充実しうるかということであった。

前年度に明らかにしたとおり、明治～戦前期における「女子体育」というテーマは社会的な「婦人問題」とは認識・実践ともにかい離していた。そして次年度の調査・分析によって、戦後社会においても、体育という領域における女性のあり方を追究する姿勢は、女性の社会的位置づけをめぐる問題認識とは視角が共有されていなかったことが明らかになった。このことは、体育・スポーツとジェンダーに関する研究、なかでも現在の体育・スポーツ界およびそこにかかわる女性のあり方とフェミニズムが射程にふくむ社会的諸問題との関係を考察するにあたり、重視すべき点だといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

春日芳美、稲葉佳奈子ほか3名、明治期の中等教育における女性体操教員像の検討、スポーツ教育学研究、vol.30、2010、25-36、査読有。

〔学会発表〕(計1件)

春日芳美、稲葉佳奈子ほか2名、大正期婦人問題と女子体育の関係性についての検討—衛生学的観点に着目して、日本体育学会、2010年9月9日、中京大学。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

稲葉 佳奈子 (INABA KANAKO)

成蹊大学・文学部現代社会学科・専任講師
研究者番号：70431666